

若越郷土研究

26の2

周縁における

同族神の祭祀形態

「同族神の試論的考察」資料補遺

金田久璋

一 はじめに

まず本稿のいきさつについて少しふれておきたい。昨秋安間清氏(大野市出身)の編著になる『柳田国男の手紙―ニソの杜民俗誌』(大和書房)が刊行された。内容は氏宛の未発表書簡三六通と、副題が示すように『大飯郡大島村民俗誌』『ニソの杜調査』報告書によりなっている。特に第三部の『ニソの杜調査』は、早く『民俗学研究』第三輯に掲載されてより以後、ニソの杜研究における初期の調査

金田 周縁における同族神の祭祀形態

報告書として、橋本鉄男氏の『ニソの杜』等と共に資料的に極めて信頼度の高い文献とされている。調査の際に多大の協力を惜しまなかった、大島在住の大谷信雄翁の精魂をかたむけた草稿『島山私考』におけるニソの杜の記述が、『ニソの杜調査』以後の基本的な資料となったことはよく知られているところである。

ところで初期のこのような資料に対して、現地の再調査と資料批判を行うことで、ニソの杜研究へのあらたな視座を築き、伝承通り暗黙裏に認められていた先祖祭祀起源説に学説の検討を迫ったのが、東京在住の新鋭の学究佐々木勝氏であった。その提言を柳田民俗学への真摯な内省を契機にした、最近の学会の動向を反映するものとして最大限評価しつつも、若狭における伝承の普遍性を重視し、広範囲な資料をもとにあらたな方法論を模索している私との間で、論争が生じつつあることは『週刊読書人』の福田アジオ氏による『柳田国男の手紙』の書評に少しふれられている通りである。

ではいったい何が問題とされているのか、争点は何かということについては、詳細は心ある読者の参照を乞うしかないが、一言でいえばニソの杜をはじめとする若狭のグイジヨコ・地の神・荒神・杜神等の同族神・屋敷神・小祠信仰は先祖祭祀を起源とするのか、或は近隣地縁の聖地信仰が素型かということになる。

最新刊の『民間信仰辞典』(東京堂出版)へニソの杜の項には、「ニソの杜は旧家本家筋の屋敷神が拡大して地縁神化して成立したという説と当初から近隣の地縁神であったという説と両説があつて、一方的に論断できない」(飯島吉晴)との記述がなされているが、これは『若狭の民俗』(吉川弘文館)の福田アジオ、直江広治(両氏の所説や、佐々木氏の論考がいち早く反映したものと思われる。最近の論文において佐々木氏はニソの杜新嘗説を標榜しはじめているが、これは何も新しい学説ではなく、すでに橋本鉄男氏等の先学によって、御霊防塞・墓制説等とともに、濃厚に民間新嘗的要素のあることは

指摘されているところである。言うまでもなく民間信仰は、習合混淆を重ねた複合的構造として現象している以上、そのベースにある信仰なり祭祀を究明することは極めて至難なことといわねばならない。

さればこそ論争を通じて浮上してきた問題は、むしろ争点にあるのではなく、日本民俗学の根底において問われていることは、調査研究の方法論ではないのかという感が、一方の当事者たる私にはある。少くとも同族神の研究分野に限ってみても、その研究方法はまだ確立しているとはいえない。重出立証法や民俗周圏論は十分に可能であろうか。編年という過大な要請にこたえうるであろうか。県内の斯学の動向においても、方法論的な覚醒にうらうちされて記述された研究書や民俗誌は寡聞にして知らない。五・五五年度にわたる文化庁、県教委主催の緊急民俗調査にたずさわってその感を深くしたところである。「聞き書きおそるべし」(平山敏治郎)、不確かな調査方法に

よって明文化された資料と、その資料の操作によって論証される学説とはいったい何か。昨年の三県民俗の会年会で動向発表の際自戒をこめて指摘した点は一ここにかかっている。さらには、昨年の日本民俗学会の年会におけるシンポジウム『都市の民俗』において、「被調査者のライフヒストリーこそ問われねばならない」とする中村孚美氏(文化人類学専攻)の指摘は十分に傾聴に価する。より根源的には、調査研究者の人間性もまた民俗事象との接点において問われていることを認識せねばならない。まずは資料操作法以前の調査方法の段階を、厳密に検討すべき時期にきている。恣意性におちりがちな民俗学の、草創期から根源的にかかえこんでいる弱点和限界を認識し克服しないかぎり、民俗学による歴史の相互補充はおぼつかないであろう。もっとも基層の民俗文化が反映されない歴史は、眼玉の入っていない仏像のようなものであることには相違ない。

さて本稿は『民俗学論叢』二号掲載の



高浜町高野遠景

『同族神の試論的考察―若狭におけるダイジョコ・モリ・地荒神をめぐる』の資料補遺である。スペースの都合上はぶいたり簡記した資料の細部であるが、資料として独立しうるような心がけた。ここでとりあげる高野・小和田の七森と旧栗野村のダイジゴは、いわば若狭における同族神祭祀の極めて過密な地帯の周縁に

位置する。佐々木勝氏が『民俗学論叢』一号所載の『杜神信仰の諸相』において、「ある民俗事象をその母体である伝承地域の中で明らかにしていくという立場をとる場合には、この『周辺』という空間がその背後に必ずついてまわるに違いない」と述べているように、周圍論的な把握が同族神の研究においても可能なかどうか、或はあらたな方法論を模索することにおいても、極めて重要な地域であり、したがって本稿資料の意義もそここそ見出しうるにちがいない。

二 高浜町高野・小和田の七森

(1)高野(三六戸・臨濟宗)

青葉山の中腹に点在する山村であり、カブと呼ばれる同族の本家七戸とその分家(ワカレ)によって成り立っている。むろん全てあてはまるわけではないが、例えば姓を見ても盛ノ下家の分家が、盛本・森岡・森口・森下を名のっているように、今なお同族関係が明瞭である。しかし同族意識は本家の当主たちをなげか

金田 周縁における同族神の祭祀形態

しめているように、戦後一層稀薄となり、同族間の結束も弱くなっている。その傾向は七森と呼ばれる株荒神の祭祀形態に如実にあらわれており、株内の者は本家筋の株荒神にまいることとされているが、現在は自宅の地主荒神を祀るのがせい一杯なように、著しく習俗の変容と衰退が見られる。当事者たる七森の祭祀者自身においてすら伝承の合理化が行われていることは、伝承母体の年代層に差違となつてあらわれている。例えば大正四年生れの糀谷保二氏は、七森が「先祖たる平家の落人をまつる塚(墓)」であるとかたくなに伝承しているが、一世代あとの昭和四年生れの南邦男氏は「神・仏は別である以上先祖をまつる塚ではなく、七家の開拓の中心地であり氏神以前の一族の守り神」としているように、世代が降るほど合理的な解釈を混じえていることが理解される。このような解釈伝承が佐々木氏等の都会地に育った新鋭の学究の所説と、奇妙な一致を見せていることは興味深いところである。ニソの杜においても忠実

な伝承の記録『島山私考』に異をとねる研究者が出てきたように、数十年後再調査の機会があったとしても、同族意識は皆無となり、先祖祭祀も形骸化が一層すすんでいることであろう。以下に七森の祭祀者と祭祀形態について一覧表を作製することとする。(下記別表参照)

祭日は旧九月九日(昨年は十月十七日)



高浜町高野 株講(レンガク講)

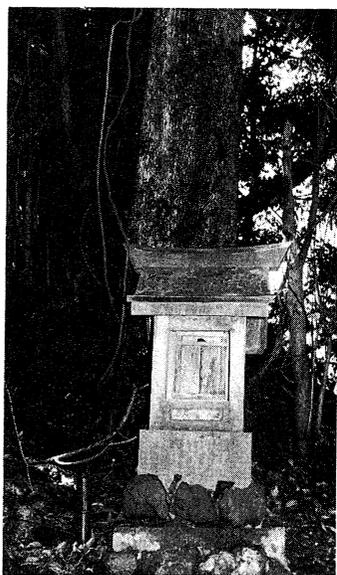
に該当)、この日は金劔神社の旧祭日に当る。小和田の七森・ダイジョウコノ祭において霜月二三日の祭が今なお行われているように、当地においても霜月祭が素型として予想される。株講がレンガク講と別称されていることから、宮座の神事に移行した可能性大である。輪番でつとめる講宿でオヘイを七本つくり、各自の株荒神のモリへ詣り神酒・洗米を供えたあと、講箱(虫除けの札あり)を床の間にすえ神酒・洗米・ニシメを供え、心経と「カミヲタツテカミトナス、アビラウンケンソワカ」と七回となえてから

会食する。供物も以前は赤飯やモチが供えられたが、現在洗米に変わっており、祀り方の順序などにも幾分変化が見られる。株講には分家は一切関与しないが、山の口講(二月四日、十一月四日)にはスリゴクを供えることとしている。なお七森の分家窪田甚左エ門・津田勘右エ門・大江芳太郎・常盤長右エ門・高住喜左エ門・河端泰好家と端高寺には、家敷内や田の畦・ヤブに小祠をかまえたり自然石を安置して地主荒神を祀っており、山の口にスリゴクを供えている。高住家は糍谷家の分家であるが、百年前に常藤の田を購

入したため、常藤のモリのかわりに田の畦に石をすえて地主荒神として祀っているのだという。祠を持つものの中には玉石か「奉勸請地主荒神維持文化七年午ノ四月廿一日」「奉祭祀地主荒神守護所 明治六年癸酉年八月吉日(窪田家)」と書かれた神札を納めてある。七森同様先祖を祀るとする伝承も見られる。墓制は典型的な両墓制。弔い上げは五〇回忌、夕モで枝つきのトウバをつくる。弔い上げ後仏は神さんになるという。ダイジョウコという神名は見当たらないが、以前毎月十一日にお伊勢さんを祀るダイジングウ講が神



高野盛ノ下家の株荒神のモリ



高野一瀬のモリ

社で行われたとのことである。

(2) 小和田(四八戸・真言宗)

中世においては、高野、中山に隣接する青葉山の中腹に位置していたが、時代が降るごとに現在の山麓下へと移行してきたといわれている。その傾向は新築ごとに県道添いの平野部へと移住する村の景観に認められる。モリの祭場もこの伝承と傾向を無視しては推考できない。現在の祭場は、信仰と祭祀はいざ知らず、つまりは中世以降の所産ということになる。

同族をあらわすカブという言葉は残っているが、高野同様当地においても現在同族の結束はそれ程強くはなく、七森の祭祀にも直接の関わりはない。(下記別表参照) 祭日は十一月二三日に一定しているが、一瀬家のように盆・正月・祝事に移行している例や、転宅・売買等により祭祀のとだえているのが多い。七森のうち奥西のモリに古い祭祀形態が伝承されているように見うけられる。祭祀者以外の村民の意識においては、古墳のあるヤブ、一瀬家の地主荒神のシイなどもモリさんと

呼称されている。以上の他に、分家筋の家で地主荒神を祀る家は、盛次九郎次郎(「明治二六年 地野土皇神コンリュウスル巳ノ年二月吉日 大工西畑安太夫」)一瀬久助家(玉石)があり、家の守り神として盆正月に祀っている。ミバカといシバカに分かれる両墓制。五〇回忌の弔い上げには、タモの木でハトウバを作る。生れかわって神になるという。

三 旧粟野村のダイジゴ

市の南西部野坂山系の山麓下に位置し、関峠によって若狭に接している。井ノ口川・黒河川の流域に点在する関・金山・野坂・筋生野・榊林・市野々・砂流・御名・長谷・山・公文名・和久野・野神の十三部落によって構成され、昭和三〇年敦賀市に合併現在に至る。純農村地帯であったが近年ベツトタウン化が進んでいる。

若狭においては、ダイジゴは全てといてよほど個人、同族組織で祀られているのに比して、越前においては大将

軍社・大神宮社として村祭祀の氏神か末社扱いされている傾向を見ることができ。そこに一向宗の影響を一大要因として考えうるが、実際もとは個人所有だったという伝承が散見される。若狭に接し近江の影響の強い敦賀市において、この祭祀形態を構図化すると、市を縦断して流れる笹ノ川によって、見事に分離されているのがわかる。すなわち越前の影響圏にあり一向宗・浄土宗の勢力の強い東岸の愛発村・中郷村・東郷村においては村祭祀、若狭に接する西岸の粟野村・松原村においては個人祭祀が普遍性を持っている。調査をしてみても、このあざやかに二相に分別される民俗分布図に驚嘆を禁じえない。

しかも後述するように、能登のアエノコトをはじめ、県内においても南条郡周辺にアエの神を祀る十二月五日の行事が散見されるが、山・御名・公文名あたりのダイジゴの祭において、この神との形態的な習合が見られることは注目される。もつともこの現象は単なる

金田 周縁における同族神の祭祀形態

る習合であつて、野坂においてはダイジ
ングと全く関係なく、野坂神社の宮田（
アイノコグ）でとれた米で共食するアエ
ノコウがかつてあつたことや、白木のア
イノカミノモリ・美浜町丹生のアイノカ
ミ・北田の饗神社・佐野の愛大神・三
方町南前川のアエノカミがあることによ
つても理解されよう。



敦賀市山 ダイジゴの祭り
(中川文四郎家)



敦賀市御名 上田家のダイジゴのモリ

敦賀市は旧愛発村刀根のジュミヨウと
呼ばれる強力かつ濃密な同族関係がある
にはあるが、多くは同族の結束のあまり
強い地域とはいえず、したがってかつて
は同族神としての祭祀が行われていたこ
とを示す伝承や形態がわずかに残ってい
るが、発展的な同族神の祭祀は見られな
い。同族の結束が未発達なのか、衰退消

滅したのか、その因由は今後の課題であ
る。墓制は旧愛発村、旧粟野村の一部に
両墓制が見られるが、その他は単墓制で
ある。（下記別表参照）（二六頁へ続く）

+++++

◇近 刊 紹 介

福井置県その前後

池 内 啓 著

福井県は本年でちょうど置県百年に当
るので、それを記念して郷土誌懇談会で
は、福井大学教授池内啓氏に「福井置県
その前後」という題で執筆をお願いした。
これは福井県郷土新書7として近日中に
発刊される。

内容は、敦賀県が石川・滋賀両県に分
割されて消滅した悲運から、福井県とし
て再誕生するまでの経緯、そして置県以
後の県下の政治状況と若き政治家たちの
動向を述べ、ついで県下の言論機関とし
て福井新聞をはじめとする諸新聞の発刊
事情を、興味深く語っている。新書版二
四四頁、定価一三〇〇円である。

金田 周縁における同族神の祭祀形態

資料番号	祭祀者名	所在地	依代・祭祀対照	供物	伝承・その他
1	盛ノ下 文治	小字神成(通称ジヌシ)の田の畦にあり	タモ、オヘイ	神酒 洗米	家号盛ノ下、分家四戸家の前に地主荒神の小祠あり。小刀と「平之家臣御之守盛次大明神魂刃禁他見」「平之家臣御之守之願所盛次魂」裏「本地十二面観音菩薩惣急如律会」と記された神札二枚を納める。 家号南、分家四戸。モリに平行して一族の株墓が並ぶ。前裁に地主荒神の小祠、神像二体と玉石安置。 家号糶谷、分家五戸。前裁に地主荒神の小祠、玉石安置。
2	南 邦男	小字堂の上、セキトウバ中央にあり	タモ・石仏数基、オヘイ	〃	家号久助、分家なし。
3	糶谷 保二	小字測ヶ本の竹藪	タモ・椿のヤブ、小祠・オヘイ	〃	家号庄右エ門、分家二戸。 家号常藤、分家四戸。洪水で流失し廃絶。分家のある一帯を常藤屋敷と呼ぶ。 一時家断絶したため、現在常藤のモリと共に五森の祭祀者により青葉神社の榎の根元で共同祭祀。
4	藤井 正治	小字東谷、米谷喜一家に売却した田の畦	タモ	〃	
5	久保 元弘	小字大上の農道傍	ケヤキ	〃	
6	常藤(不祥)	小字森ヶ後、山の神背後の山頂	不明		
7	金岡 岩雄		不明		
8	盛次 庄助	通称ダイジョーゴといふ地藏院横の円墳	タモ・祠「大將軍 平正盛」(神札)	神酒 洗米、塩	あらたかな神で枝を切るとたたる。繁るほど隆盛。 盛次大明神、先祖を祀る。屋敷裏にシイと祠(地主荒神)。おがみやに見てもらい、先祖の命日十九日に祀る。
9	一瀬 大町	盛竹二六の四(山林)	タモ・シイ・ツバ キ・祠「平盛丈大 將軍一瀬氏遠祖及 代々祖〇」(石碑)	ゴク	
10	奥西 賢治	奥西家のイシバカがある山の下(古墳という)	「大神宮」(神札) タモ	赤飯 ヘイ土本	もと内谷奥西という。本家争いにより畠中・内谷一族は株墓から分離。平家の落武者で先祖を祀る。ダイジョーゴともいう。

(2) 小和田

(1) 高浜町高野

金田 周縁における同族神の祭祀形態

11	(東山文誠)	学校グラウンド横のヤブ	タモ	洗米	もと奥西のフタモリの一つ。土地購入により所有するが、「イヤラシイサワルトアブナイ」所として祀らず。8年前転宅。旧宅に地主荒神あり。
12	盛次孫右エ門	今北二七の一(山林)、旧宅裏約十坪	タモ	オコワ	分家六戸。五十年前まで祭祀。神札掛軸の捨場となっている。百年前転宅。地主荒神あり。(ゴヘイ・石・神像)
13	井ノ上 菅雄	小字加茂川、旧宅裏の竹ヤブ	タモ	オコワ	先祖で守り神。「先祖のハカではないか」。四九年に転宅し祭祀せず。
14	馬場 弥兵治	小字由里、現在一瀬孫右エ門所有の田の岸にあり。	もとタモあり。岩	モチ	このモリさんに、「シロガラスがとまらんとヤクシのトウのしなおしをせにやならん」という。九年前転宅。セキトウ内に五輪の、旧宅に地主荒神あり。

(3) 敦賀市関(五八戸・浄土宗) 祭日十二月二三日

15	中谷 亀吉	もと関峠大常宮谷にあり。百年前前庭に移す。	石祠	オコワ	分家二戸。仲谷姓は古い分家という。分家裏にダイジゴさんがお休みにくるタモの木あり。火難盗難の神。オコワを好むという。
16	田中四郎兵衛	家敷裏	自然石、近年祠造	神酒	ダイジゴの祟りあり。
17	城 彦司	床の間、もと納屋の前にあり。	檉(神さんの木) 當。モチの木。	赤飯・アゲ タイモ・ニ ボンジン・ゴ ボウ・コン ブ・角切り 大根	分家一戸、十二月二五日祭日。ダイジゴ(大神宮)は耳が遠いので、大声でまいる。檉を切ったため祟りあり。前庭に地の神の石祠。

城家の隣家堀勘左家は、以前祭祀に加わっていたが、五十年前檉を伐採後、十二月二三日に床の間に天照皇太神官の掛軸をかかげモチを供えて内祀りをするようになった。

(4) 野坂(六六戸・曹洞宗) 祭日霜月二三日

18	祭祀者不明	笹山重治家横の溜池の岸(管地)	榎	祭祀なし。
----	-------	-----------------	---	-------

19	柴田 権太夫	分家柴田孫右エ門家の裏	櫛(シヨーンネが入っているからオズシは不要という)	赤飯・スルメ・神酒・海山のもの	ツンボなので「ダイジングさん」と大声で呼び、カラスの鳴かないうちにはまいることとされている。へび(主)とも白竜ともいう。トガメがあるから付近に下肥をまかない。
21 20	松永 清 池沢 仁太夫	前栽 倉の隣	五輪 もとツバキの木あり。石仏。	神酒 サカキ	松永敏雄家の分家。 分家なし。毎月一日一五日に祀る。ニシノカミだという。
22	森腰吉左エ門	「ダイジゴさんのヤシキ」という家の前のモリ	タモ(「ダイジゴさんの木」)、自然石。	コワメ シ・タ イ	分家なし。あらたかな神でツンボだという。先祖を祀るといふ。(大神宮と書くのでおかしな気がする)とは末次氏の話)このモリの中に他に巳さん(祠・松)と伏見稲荷(六年前に家の中より移す)を祀る。刈った下草は田には入れない。
(7) 山(六六戸・曹洞宗) 十二月二三日					
23	中川 文四郎	家敷裏の小川の岸	もとタモあり。自然石。	オコワ・神酒・大根のワシギリ・魚(スルメ)又はニシン)	ダイジゴはメクラでツンボなので、いかい声で供物の名をいう。
24	赤坂 平五郎	家敷内	櫛の根・石・もとタモあり	同	タモは鬼門よけという。カラスの鳴かんうちにまいる。祈禱師は不動だという。
25	森岡 平太夫	納屋のうしろ	タモ	赤飯・神酒 ハツキ大根 二本灯明	大神宮は先祖という。長い間子なしの時代が続き、四代前より直系。アゼチなし。鬼門とはちがう。
26	上野 太郎左	家の横	自然石(「ダイジングの墓」という)	アズキメシ 大根ワシギリ(タクラ ン)。魚・神酒・ハシ	分家二戸。ダイジングは地の神だという。ツンボでメクラなので大声で「ダイジングドン／＼／＼アカママもありますし大根もありますし、魚もありますし、ゆっくりに上って下さい」と言うこととされている。ダイジングアレの伝承あり。

金田 周縁における同族神の祭祀形態

27	下原 久太郎	家の横	アブリ柿、祠・石	赤飯・神酒 ツンボでメクラの神なので、「ダイジゴドン」／「アカママもござるし、オミキもござるし、大根のワングリもござるし、ゆっくりあがつてくだい」といつて進せる。十年前病人が出たので祠をつくり、家内息災をまぶつてもらう。「ダイジゴさんアレ」
(8)	御名(四五戸・浄土宗・天理教) 十二月二三日	納屋の前	タモ	あらたかな地面の神。巳ーさん。天狗さん。大神神宮の木をうえ祝いこむ(神主談)。小便をするとバチがあたる。心経をとなえる。ダイジゴアレ。
28	岡田 栄太郎	家敷内	自然石	サンボウに赤飯・スノモノ・コンブ・スルメ神酒・塩赤飯 井口彦左家の分家。もと出所鶴三郎家(カミテッショ)の家敷内にあり。井口家に売却したため田のヤブに移したが、山田家が田を購入、現在井口家で祀る。
29	(井口寅男)	家敷内	自然石	大明神と書く。明治二三年頃焼失の際表に移す。カラツのツボ出土。三韓征伐の折神功皇后のお伴をした「兵隊の神」で宮中でも一番先に祀るといふ(官井神主の話)。大將軍の解釈か。
30	井口 彦左	同右	自然石・もとモチあり。	先祖であらたかな地面の神。耳が悪いので「ダイジゴゴドン」／「と大声で呼んで供え物を持っていく。ダイジゴアレ。白へびが住んでいる。他人が屋敷に入るとよく祟る。当家はオヤケの株(身上のいい家)でスモウトリバシヨだったといふ。分家一戸。墓場は個人所有。天理教徒。
31	立木 休庭	家敷裏・「ダイジヨゴさんのヤシキ」	タモ・石仏・自然石	家号カミ(代官所あとといふ)。先祖を祀る。ツンボなので、お供えの品を一つ／＼といふ。三、四百年前敗残の侍が白馬にのり森に入って生理めとなった。リンがなりおわたたら、或はタモの木が枯れたら、死んだと思えといふ。耳のついた白へびが住んでいるといわれる。二〇年前土手ヤツリをして火が木のウトロに入り焼失。祟りで次々と二人死亡したことがある。春日野の七ツ塚の一つといふ。末吉夫妻は養子。ダ
32	上田 末吉	小字中筋18の5577の田の畦に「ダイジヨゴのモリ」あり	タモ・自然石	サンボウにオコウ・神酒・ニシメ五品(コンニヤク・ダイコン・チクワ・ニンジン・ヤキドーフ)ヤ

戦前ダイジゴを祀る家同志が仲間となりダイジゴ講を三、四ヶ月毎に行っていた。講帳は三八年頃の大火で焼失。その他神として祀っていないが家敷のタモの木を決して切るなどという伝承がある。

(9) 砂流(二七戸・浄土宗・曹洞宗) 十二月二三日

33	浅野 平兵衛	前栽	タモ・自然石	黒豆のオコ ワ・ニシ 二本	
35 34	富士原平太夫 庄司 重光	家敷裏 家の前	タモ・自然石(大將軍) サカキ・祠(自然石)	同右	ダイジゴさんは家敷の先祖という。 先祖をまつる。

(10) 公文名(六六戸・浄土宗) 十二月二三日

ダイジゴさんのゲタのあと云々とする伝承あり(野坂柴田里つさん談)。アトアシカクシか。

36	川端次郎太郎	家敷内	タモ・石仏	赤飯・魚	ダイジゴは地の神で先祖だという。耳が遠いので大声で呼ぶ。
37	川端 彦四郎	同右	タモ・自然石	オハギ・カ ヤクゴハン オカシラ・塩	ダイジゴアレ。直接の分家二戸。 次郎太郎とは切っても切れん仲だという。

当日は地藏堂で地藏祭が行われる。ダイジゴとはいわないが刀根義雄家にはタモ・石仏・石像をシラヘビさんとして三月二日(毎日水・塩・米)祀る。

(11) 和久野(二二戸・曹洞宗) 祭日なし

39 38	松原長右エ門 槻木 隆	家敷内 同右(もと寺にあり)	椿・自然石(大將軍) 自然石(大將軍)		ダイジゴさん
-------	----------------	-------------------	------------------------	--	--------

他に伊原力治郎家では十年前新築の際、牛小屋の敷石を田へ捨てようとして、三人がかりでかついだが上がらず、天筒山のオダイさんに見てもらったところ、ジノカミだとして、家の前に弁天・地藏・お大師と共に祀っている。

以上旧栗野村のダイジゴを列記したが、現在までの調査においては野神・市野々・榊林・金山にはその祭祀の痕跡を発見できなかった。戸数は明治十三年の調査による。

金田 周縁における同族神の祭祀形態

四 周縁の祭祀形態

本稿の結論にかえるべく、以下に如上の資料の分析検討を通して、若狭における周縁の祭祀形態を考察してみよう。

では周縁にとつてその中核をなす民俗事象とは何であろうか。緒言においてふれたように、言うまでもなくそれは若狭におけるダイジヨゴ、地の神、杜神（モリさん）と呼ばれる、三方郡遠敷郡の濃密な祖先崇拜の祭祀空間である。さらには、今回資料報告の対象とした地域の周縁をとりまくように、京都以西や山陰山陽の荒神・藪神・地神、京都・滋賀・奈良・和歌山の大将軍、越前の村祭祀の大将軍大神宮、能登の杜神、個人祭祀の大将軍や地の神がある。あるいは高浜周辺の荒神は北限といえるかもしれない。周縁の民俗の変容を構図化し分析すると、あたかも虹が徐々に七色の弧をえがきながら拡がっていくように見える。この醍醐味は一定のフィールド・ワークを経験したものでないと味わえないであろうが、民俗事象が如実に語る意味を見出すには、方

法論が確立されねばならない。

(1) 呼称 表記 高野小和田においては荒神、地主荒神・ダイジヨゴ、モリさん、栗野村においてはダイジゴ、ダイジヨゴ、ダイジングウと呼ばれる。ダイジヨゴの表記は一部に大神宮・大神宮・大明神の解釈によるものもあるが、石碑、神札には大将軍と書かれている。(2) 祭日 霜月二三日。改暦後小和田においては十一月二三日、栗野村では十二月二三日があてられている。高野の株講は霜月祭から宮座の神事（田楽講）に移行したものと考えられる。小浜市奥田繩の四塚（モリ）に見られるように、高野の分家筋の地主荒神の祭日は山の口講（山はじめ・山おさめ）になっている。小和田では盆・正月・祭日なしが多い。(3) 神供 赤飯・小豆飯が普遍的であり古態であろう。高野・小和田のスリゴク、砂流の黒豆のオコワに変遷が見られる。他に神酒・塩・魚（タイ・ジャコ・スルメ・ニシン等）ワンギリ大根・ニシメ。ワンギリ大根やタクアンは新庄に顕著な

ように二又大根の変遷と考えられる。二人分の供物は夫婦神をあらわしている。

(4) 依代・祭祀対象 ほとんどがタモの巨木であり、現在樺・椿・柿等の雑木が生えていても、かつては中心にタモがあった伝承が多い。タモを鬼門除けとする習俗もあり、屋敷のタモを切るなどする言い伝えもある。他に椎・樺・榎・椿・柿・岩・自然石・石碑・石仏・五輪・神札・ゴヘイ・神屋を持つもの。モリさん、或は〇〇のモリと呼ばれ、小森林を形成しているものは古態と考えられているが、果たして自然の森を聖地として祀ったものか、聖地や崇り地が森化したのかは、現象や外観の形態だけでは判断できない。(5) 祭祀組織 七森においては、旧家本家の個人祭祀から同族間の祭祀への移行が見られ、そこから派生した分家筋の地主荒神がある。栗野村にはほとんど同族神への展開は見られない。したがって同族祭祀の活性化により祖先神化するという論拠は当を得ていない。それとともに近隣地縁の祭祀組織は皆無であり、売買

関係においては地の神・屋敷の守護神として祭祀する傾向が見られる。

(6) 祭場 家敷内の前栽・前庭が栗野村では特に多いが、七森のように森化しているものは、山すそ、田の岸に位置している。墓制との関わりにおいては、南のモリ・奥谷のモリ、盛次庄助家のダイジョゴ(古墳)・上田家のダイジョゴのモリ(塚)があり、特に上田家の伝承に弔い上げのイキトバを連想させるのは注目される。「ダイジンの墓」という呼称も興味深い。関中谷家のように一キ口も離れた大常宮谷から、積雪のため祭場を家敷内に移動した事例は「広義の屋敷神」(直江広治)に当る。

(7) 神の性格・習合関係・その他の伝承 先祖を祀るとするもの、先祖をいけた塚とするもの・先祖たる平家の落人の塚敗残の武将を埋めた塚・家敷の先祖・家敷の守護神・地面の神・地の神・巳さん、天狗さん・白竜さん、呼称からお伊勢さん、大神神社、不動と解釈するものなどが見られる。地の神・家の守り神という

基層には祖霊観が認められるが、現時葬墓制への合理化によるその稀薄化は時代の趨勢となっている。タモの木にまつわる祟りの話も必ず伴っている。

他の信仰との習合については、山・御名・公文名周辺にアエノコトに類似した祭り方が見られ、饗の神(田の神)との関係も重視されねばならない。山の神については、祭日の移行の他、御名上田家のダイジョゴのモリの伝承に出てくる白馬は、或は山の神の使いであろうか。もつとも当域は白ウサギが普遍的である。

このモリにまつわる即身成仏の伝承は、野坂の中雀地蔵にも見られる。なお地主荒神なる神名は習合と妥協の所産であろう。

その他、ツンボ・メクラ・ダイジョゴアレの伝承に見られる片脚神・不具の神・大師講との習合も注目されよう。ニソの杜のクラスグチや、小和田の馬場のモリ、野坂・山のダイジゴに見られる鳥勧請を予想させる伝承の素型は、より古い神祭りの形態に相違ない。

最後に方法論への模索を二、三指摘しておく。まず重出立証法についてであるが、若狭およびその周縁をフィールド・ワークしてみても、まだ部分的ながらかなり有効な感触をえている。たとえば前記の鳥勧請についていえば、(一)ニソの杜における神供の場所としてのクラスグチ(二)「モリにシロガラスがとまらんとヤクシのトウのしなおしをせにやならん」との馬場のモリの伝承(三)「アケガラスの渡らん先に詣らにやならん」(新庄・野坂・山)という三点の断片的な伝承・祭祀方法の比較によって実証し、素型を復元することができる。

民俗周圏論については、やはり複合的構造をもつ民間信仰の分野に応用するのはかなり無理がともなうようである。民俗事象の発祥の光源、すなわち周圏の中心をどこに求めるのか、その差違を歴史的時間に置きかえうるかどうか。むしろ考察の過程で若狭と越前の信仰基盤を問題としたように、地域構造の立地条件による変遷の方が大きいと思われる。もつ

とも若狭という小地域に限ってみれば、名田庄の阿倍陰陽道を光源とする大將軍信仰の周圍論的分布は一応認めうる。

文献史料の応用については、佐々木勝氏は瓜生の杜の解明に講帳の覚書を活用したが、たかが半世紀の状況も語りえない近世史料によつては、決して素型へと遡及できはしないであろうし、したがつて血縁か地縁かとの氏のテーゼは方法論的に無効といわねばならない。

複雑な習合と基層にある信仰を、時間的な推移をはかりながらえりわけていく作業は、科学的な方法論を必要とするが、同時に伝承の荒々しい根にたくわえられたプリミティブな力を見きわめる感性こそ、民俗の胸奥にほのおのような命を吹きこむことができる。「日本民族の魂の問題」(谷川健一)^⑥がそこに大きく横たわっているからである。

註

- ① 佐々木氏のこれまでの関係論文は発表順に紹介すると、「ニソの杜」祭祀の変遷」(「日本民俗学」一二二号昭和五四年三月)

「杜神信仰の諸相」(「民俗学論叢」創刊号昭和五四年八月)、「杜神信仰の構造—小祠信仰と農耕儀礼の接点」(「日本民俗学」一二八号昭和五五年七月)があり、杜神信仰に関するものとしては、「同族神祭祀の変遷—木曾谷のモロキ・祝神・モリをめぐって」(「日本民俗学」一一一号昭和五二年五月)がある。

② 「ニソの杜と若狭の民間信仰」(「歴史手帖」昭和五四年五月号・名著出版刊)

「同族神の試論的考察—若狭におけるダイジョコ・モリ・地荒神をめぐって」(「民俗学論叢」第二号昭和五五年十二月)

③ 「杜神信仰の構造」(「日本民俗学」一二二八号)

④ 「屋敷神の研究」(吉川弘文館刊)

⑤ 「ニソの杜」祭祀の変遷」(「日本民俗学」一二二二号)

⑥ 「柳田国男と折口信夫」(池田弥三郎・谷川健一・思索社刊)

付記

調査は一九七九年二月以降数次にわたりに行ったものである。話者は原則として祭祀者が当家の故老によつた。写真の撮影は昨年の各祭日のもの。なお誌面の編

集上、草稿では章毎に構成してあった資料(一覧表)を、一括別組みとしたことをおことわりしておく。